

「甘露の変」始末

— 唐代政治史の一齣 —

横山 裕男

序 言

唐王朝の命運の半ば以上を制する役割を担ったといわれる安史の乱後の唐代社会は、中国史の中に於いて、きわめて注目される歴史的役割を果たしたものであった。その役割とは、五代十国の分裂社会を経て宋王朝の統一社会——同じく統一社会とはいえ、唐代のそれとは全く異った性格の社会——の出現を導いたということである。この社会変化の過程を説明するにあたって「唐宋の変革」という語句が用いられる。けれども、「変革」の性格については、人それぞれに異って居り、未だに一致した見解がない状態である。それは、最終的には「変革」の性格を規定しようとする人自身の中国史の時代区分論にかかわるものでもある。私自身についていえば、「変革」は貴族制を根幹とする中世社会から非貴族制を根幹とする近世社会への転換期と捉えている。「変革」の性格を分析する場合、多くの視点を設定することが可能である。本稿では、1970年の拙稿「唐の官僚制と宦官—中世的側近政治の終焉序説—」（中国中世史研究会編「中国中世史研究」所収）の視点に基いて、政治史の側面から、特に宦官勢力と皇帝との在り方を浮彫りにした「甘露の変」を中心に考察を加えることにした。

宦官勢力の抬頭と拡張は、皇帝権力の強化を志向する皇帝の意向と表裏をなすものであった。その経過の概要はすでに前掲の拙稿にのべてあるが、もう一度繰返すならば、おおむね次のごとくである。

唐初の政治機構は三省六部に集約される。三省は、その起源にさかのぼると、いずれも門閥貴族に対して皇帝の主導権確立を企図する皇帝の私的秘書機関であったものが、貴族との間に妥協が重ねられていく間に公開された国家政治機関としての性格をもったものである。かくして、唐初の政治機構は、皇帝と貴族との合議政治体制の色あいを濃いものとしていたといえる。けれども、この際見逃すことができないこととして、貴族層の門閥意識に微妙な変化が生じていたことがある。それは、隋以来の新たな官僚登龍門、科挙にどう対応するかによって生じたものであった。門閥と科挙を通過すること——自己の才能を皇帝に認めさせる——との両立を目指した譲歩の道がとられることになったこと、これである。これは、皇帝にとっては権力強化に手がかりを与えられたことを意味した。貴族層に対しては、それぞれが満足するであろう家格に対応した官職を与えながら、皇帝の周辺には律令官制に拘束されない側近集団を形成して実権を吸収する方策が可能になったからである。その際、唐朝律令官制が無意味としかいいようのない重複を含んでいたことも、政治の簡素化を名目とする側近集団の形成を容易にしたと思われる⁽¹⁾。このような官僚側近集団の形成の副産物として抬頭してきた一集団があった。宦官集団である。

宦官それ自体は、もとより唐代独特の存在ではない。けれども、「変革」の過程に於いて、特に専横をきわめ、皇帝の擁立すら意のままにするほどの勢威を誇った点で見過すわけにはいかない意味をもつものであろう、と私には思える。

宦官が集団として皇帝の権力強化のための側近として政治の表面に登場して来るのは、徳宗(779～805在位)治世に於いてであった。しかも、この時にいたって、宦官の存在は宦官実力者と皇帝との間の単なる個人的恩寵関係によって皇帝の庇護の下にあるのではなく、宦官集団の意向を皇帝の意向として政治に反映させる存在となった。そのような存在になったことは、宦官が禁軍を掌握するようになったことと無関係ではない。建中4年(783)10月、涇原軍の兵変に際して、士人の指揮に委ねられた禁軍が皇帝の藩屏として何の役にもたたなかった現実に直面した徳宗は、至極短絡的に、皇帝権強化には禁軍の強化が必要であり、そのためには、禁軍の実質的指揮権を皇帝に密接した存在である宦官に委ねるのが勘要と判断した。彼が試みた禁軍強化策は、従来の六軍及び神策軍左右廂・殿前射生軍(のち神威軍と改む)左右廂が昇格した左右神策・左右殿前射生四軍の実質的指揮権を宦官が任用される監軍使に吸収し、貞元12年(796)には、禁軍の指揮権を左右神策軍の護軍中尉の手に帰することにしたことであった。

宦官集団が禁軍を掌握することになって見ると、皇帝が目指した側近集団の強化が皇帝権の強化につながる方向とは逆に、宦官集団が見込んだ人物を先帝の遺命という名目の下に帝位につけ、思うままに皇帝権を利用することが可能な方向へと事態はすすんでいった。これに対して、皇室内の出来事については「皇帝の家事」ということで口をさしはさまぬ慣習を守ることによって官僚体制内への足がかりを保ってきた貴族官僚は、その方向を認めざるを得なかった。官僚体制内の名誉ある地位も宦官と誼を通ずることによって保証されるのだから⁽²⁾。

1

大和9年11月壬戌の日のことであった⁽¹⁾。文宗が大明宮内の紫宸殿に出御し、百官もそれぞれきまりの位置に威儀を正して整列を終えた。左金吾衛大將軍韓約がすすみ出た。規則では、第一にせねばならぬとされている、大明宮と長安市街とを隔てる丹鳳・望仙・建福など諸門のかためとなる場

所に位置する左右金吾衛庁舎の内外に異常がない旨を報告することもせずにやにわに奏上した⁽²⁾。

「昨夜、左金吾衛の庁舎の後の石榴に甘露が降りましてございます。私めはすでに、順序をとおして陛下に申上げております。」

そして、踏舞して再拝した。宰相もまた百官を帥いて賀を奏上し、更に宰相李訓と舒元興は、文宗自ら件の場所に赴いて天の賜物を承けるようにすすめた。文宗も承知したので、百官集会の場所を現場により近い含元殿に移すことにした。辰の刻、文宗は含元殿に出御すると、宰相達に命じて件の場所に赴いて甘露の降りた在様を視させた。しばらくあって宰相達が還って来た。李訓が代表して報告した。

「私共が見たところ、どうも真物の甘露とはうけとれません。あわてて甘露の降りた旨を布告するのはどうかと思われます。そんなことで天下が慶祝騒ぎをおこしては困りますから。」

文宗は、

「どうして真物でないなどといえるのか。」といながら、神策護軍中尉仇士良・魚弘志兩名に宦官達を帥いてもう一度たしかめるよう命じた。宦官達が出て行ってしまおうと、李訓が邠寧節度使郭行餘・河東節度使王璠を召しよせ勅旨を受けるよう命じた。ところが、王璠は足をふるわせるばかりで前に出ようとしないので、郭行餘だけが含元殿の階下にすすみ出て勅旨を受けた。この時、郭行餘・王璠兩人の部下数百人は、皆武器を携えて丹鳳門外に屯していた。李訓は先に人をやって、門内に入って勅旨を受けるよう命じておいたが、ただ郭行餘の部下が門内に入っただけであった。一方、仇士良等は甘露と称するものの在様をしらべていたが、立会いの韓約の様子がどうもおかしい。怪しんだ仇士良が、

「お手前、いったいどうなされた。」

と尋ねていたところ、一陣の風が石榴の樹のまわりに張られていた幔幕を吹きあげた。見れば武器を携えた者が多勢いる上に、武具のふれあう音がきこえてくるではないか。仇士良等がおどろきあわてて齊徳門から含元殿へ走り去ろうとするのを見た門番は門を閉ざそうとしたが、仇士良の一喝にあって門はかからずじまい。含元殿に馳せ還っ

た仇士良等が文宗に変事を告げるのを見た李訓は、あわてふためいて金吾衛の兵士達を呼び、

「ここに来い。殿に昇って陛下をお衛りした者には、百貫文の褒美をとらす。」

と叫んだ。宦官一同、事は重大と見て、文宗に還御を願い、即ちに輿をかつぎあげ、文宗をささえあげるようにして乗せるや含元殿北面の網戸を蹴やぶって真直北に出ようとする。李訓もそうはさせじと輿にとりすがって、自分の事情説明の奏上がおわっていない旨を訴えつづける。文宗がこれを叱りつけるところへ、宦官郝志榮が拳をふるって李訓の胸を一撃したので地面に倒れた。文宗を乗せた輿が宣政門に入るや門が閉され、宦官一同万歳を唱え、これを聞いた官僚達はあわてふためいて退散した。

一方、含元殿ではでは、金吾衛の兵士が殿に昇るとみるや、京兆府少尹で府尹代行の羅立言が京兆府の邏卒三百余人を帥いて東から、御史中丞李孝本が御史台の従卒二百余人を帥いて西から来て含元殿に昇り、逃げおくれた宦官をめったうちにしたので血を流し無実をさげびながら死傷した者が十人余りもあった。

謀事がならなかったと悟った李訓は従者の緑衣を脱がせて自分が着こみ、長安の街に馬を走らせながら叫びつづけた。

「わしは何の罪で宮中からとおざけられるのだ。」

これを聞いた人々に、李訓がお尋ね者の身になったのだと疑う者はなかった。

宰相王涯・賈餗・舒元興の三人は、中書省に還り政事堂に集まったが、互に、

「陛下は、延英殿に吾々をお召しになったとき、今日のような一件について相談をなされたことがあつたらうか。」

と言いたてるばかり。部下の官僚がやってきて、今日の出来事はどうしたことかとたずねると、皆一様に、何事も知らぬ、諸君がそれぞれに推測せよ、というばかりであった。

一方、仇士良等は、文宗が今回の謀議に参画していたと知って、うらみつらみのあまり不遜にわたる言葉さえ口にするが、文宗は、ただただはじり懼れるばかりで返す言葉もないありさま。仇士良等は左右神策軍副使劉泰倫・魏仲卿に命じて

禁軍兵士五百人ずつを帥いて拔身の刀をもたせて紫宸門の小門から出て叛徒平定に向寄せた^③。慣例による会食をしようとしていてこのことを知らされた王涯等三名の宰相は、あわてふためいて政事堂を逃げだし、どうやら大明宮を脱出した。宦官のみなごろしに加担したということで叛徒と目された金吾衛の吏卒千余人も禁軍兵士の追及を逃れようと宮門に殺到して先を争ったが、門が閉ざされたため逃げおくれた六百余人はみなごろしにされた。仇士良等の追及はそれでも終らなかった。禁軍兵士をいくつかのグループにわけて大明宮のすべての門を閉ざし、宮内にある諸官衙を捜索し叛徒捕縛につとめさせた。このために諸官衙の下役人や、大明宮内に物売りにきていた庶民までもがみなごろしにされ、死者は千人余にのぼった。更に、騎馬隊千余騎を派遣して長安城を出て逃亡者を追捕させる一方、禁軍兵士による長安城内の市街の捜索が行なわれた。この捜索で捕えられた主要人物は、舒元興・王涯・王璠・羅立言の四人。就中、哀れをとどめたのは、王涯・王璠の二人であった。

王涯は、徒歩で永昌里の茶店まで来たところを捕えられて左神策軍に拘留された。時に70余歳。手枷足枷の上で加えられる拷問の苦痛に堪えきれず、相手のいうがままに供述した。

「李訓と相談づくで大逆を行ない、かわりに鄭注を皇位に擁立しようとしたのだ。」と。

王璠は、長興里の私邸に帰りつき門を閉ざし、麾下の兵士達で衛りをかためていたが、神策軍の将校が門のところまでやってきていった。

「王涯奴らが謀反を行なったので戸部尚書様(彼は当時戸部尚書判度支の肩書で河東節度使に任ぜられていた。)を宰相に起用されようとの魚護軍の意向をお伝えに参りました。」

これを聞いた王璠は喜んで門を出て将校を引見した。将校も祝いの言葉を再三にわたって述べる。その様子からどうやら給かれたと知った王璠は、涙にむせびながら連行された。左神策軍の屯所で出会った王涯と王璠との間には、次のような言葉が交された。

王璠「貴公自身が反逆を謀ったからとて、どうしてこの私が拘引されねばならぬのだ。」

王涯「貴公が昔京兆尹だった時、われらの謀計

を王守澄に漏らしたりしなければ、今度のことはなくてすんだのだ」⁽⁴⁾。

王璠はうなだれて返す言葉もなかった。

この捜索によって王涯等の家族も左右神策軍の屯所に連行拘留されたのはいうまでもないが、さしてかかわのない人々でも殺されたり、財産目当に禁軍兵士に邸内をあらされたりした者もあった。また、長安市中にたむろす愚連隊が、騒ぎにかこつけて、日ごろのうらみをはらさんものとして人殺しを企てたり、財貨掠奪を企てるなどして互に争いをおこしたので、土煙がたちこめて陽光も暗くなるほどの騒動の一日となった。

以上が「甘露の変」の事件の一日の記録である。これは、宦官集団誅滅計画の失敗の記録である。このような計画が何故に樹てられ失敗したのかを次に述べる。

2

この事件は、王涯が供述したような、鄭注をかついで唐の天下を顛覆させようとの陰謀からおこったものではない。それはつとに文宗も承知の上で樹てられた宦官の一挙誅滅を謀ったものであった。宦官が何故にそれほどまでに目の敵にされたのか。その淵源は、玄宗の時代から伸長し、安史の乱につづく混乱の中で一擧に拡張されて来た宦官の政治的権勢にあったといえる。

元来、宦官は、宮中に於ける后妃女官の身の廻りの世話や監督などを職掌とする者で、法制的にも社会的にも微賤な存在であった⁽¹⁾。けれども、反面に於いて、宦官はその職掌の性質上、何かと皇帝の意向を知りやすく、政治の動向をも察知しやすい立場にある。皇帝にとっては、皇帝権力を強化するためにうまく使えば良薬ともなるが使用法を誤れば王朝の存立の基盤をも揺がしかねぬ毒薬ともなる劇薬的存在であった⁽²⁾。この点を考慮して、唐初においては、宦官は四品以下の職事官にのみ就きうるとする制限が設けられていた⁽³⁾。この原則がくずされたのは、天宝13載、内侍省の機構が改められたときにあるとされている。『資治通鑑』(以下『通鑑』と略記) 217天宝13載11月己未の条に

置内侍監二員。正三品。

とあり、宦官の元締である内侍省の機構を改め、従来、内侍省には長官たる監を置かなかったのを監二員を正式に設けたのである。また同条の注で胡三省は、

唐制。宦官不得過三品。置内侍四人。従四品上。中官之貴。極於此矣。至帝始隳其制。楊思勗以軍功、高力士以恩寵、皆拜大將軍。階至従一品。猶曰勳官也。今置内侍監。正三品。則職事官也。

と述べ、従来まれに驃騎大將軍など従一品の官階につく者もあったが、それは実職のない肩書にすぎぬものであった。それが今や職事官としても三品清望官⁽⁴⁾につくことが出来るようになったことに注目している。以来、内侍省の構成は次のようになった。

内侍省。監二人。従三品。少監二人。内侍四人。皆従四品上⁽⁵⁾。

しかし、法制的に三品職事官に宦官が就き得ることになったことが、ただちに宦官一般の権勢を強めたことにならないことに注意する必要がある。天宝13載の改制に当って内侍監になったのは、高力士、袁思藝の兩名であった。是れより先、高力士は開元元年、玄宗の地位安定に果した功績によって宦官としてははじめて右監門衛將軍(従三品)を帯びて知内侍省事となり、天宝初年には右監門衛大將軍(正三品)を帯びている。このため宦官の勳功ありと認められるものは陸続として三品將軍となり、高力士を頂点とする宦官集団が形成され、その勢当るべからざるものがあつたといわれるが⁽⁶⁾、それは、玄宗と高力士との私的な信頼関係を軸として形成されたにすぎぬもので三品將軍を帯びる者が多くなったというのも、恩寵の程度を表現するだけのものであって実職としてのそれではない。天宝13載の改制も、表面的には単なる恩寵の表現としてではなく、宦官が実質ある三品職事官を手中にしたかに見えること胡三省の指摘のごとくであるが、実情は宦官を本来の職掌たる内侍省にとじこめることをねらった楊国忠の策謀によるものではなかったかと私は考えている⁽⁷⁾。事態は徳宗朝に入って一変したことは先に述べた。補足すれば、この時に至って禁軍中に於ける神策軍の存在はゆるぎなきものとなり、その指揮官たる護軍中尉は実質的には禁軍全体の統率者で

あり同時に宦官集団の代表者として権勢並びなきものとなったのである。このような趨勢に反発し、中途半端ではあったが宦官勢力の抑止に腐心したのが「甘露の変」を謀った文宗その人であった。

3

文宗、諱は涵、即位後改めて昂。唐朝第14代皇帝である。元和4年10月10日第12代穆宗の第2皇子として生れた。彼が皇位に即き得たのも宦官の力による。稀代の遊蕩天子といわれた敬宗が宦官劉克明らに暗殺された際、劉克明らは憲宗の第6皇子絳王悟を擁立し、宦官実力者左枢密使王守澄・護軍中尉魏從簡らの追落としをも実現して権力を自己の手中にしようとした。この企ては、王守澄らの迅速な対応によってつぶされ、王守澄一派は、当時江王として藩邸にあった文宗を迎えて新皇帝に擁立し、自己の権勢をより固いものにしたのである。軍隊を承握した者がいかに強いかをまざまざと見せつける一幕である⁽¹⁾。

文宗は、性格的に自己の意向を堅持することが出来なかった。初めは、却って己を虚しうして他に聴く態度ととられて、士人には近来稀な人物と期待されたが、欠点は次第に露呈された。宰相と政治的決定について相談がまとまっても、いつの間にかちがった決定がされることが多くなった。その点を宰相韋処厚に鋭く批判されているが、性癖はどうしようもなかった⁽²⁾。そのような文宗に半ば執念のようになっていたのが宦官勢力抑制の一事であった。自分の周囲を見ても頼りになりそうな人物はいない。頼りにし得る人物を発見しようと、大和2年春、賢良方正能直言極諫科の制挙が行なわれた。挙に応じた者百余人、大方はとおろし一遍の対策を提出したにすぎなかったが、劉蕡の対策は宦官の横暴がやがて社稷を危くするであろうことを指摘し批判していた。その要旨は次のごとくである⁽³⁾。

(1)陛下……將杜纂弑之漸，則居正位而近正人，遠刀鋸之賤，親骨鯁之直，輔相得以專其任，庶職得以守其官。奈何以褻近五六人，搃天下大政，外專陛下之命，內竊陛下之權，威懾朝廷，勢傾海內。群臣莫敢指其狀，天子不得制其心，禍稔

蕭牆，姦生帷幄。臣恐曹節・侯覽復生於今日。此宮闈將變也。

(2)今公卿大臣非不能為陛下言之。慮陛下必不能用之。陛下既忽之而不用，必洩其言。臣下既言之而不行，必嬰其禍。適足以鉗直臣之口，重姦臣之威。是以，欲尽其言，則起失身之懼，欲盡其意，則有害成之憂。故徘徊鬱塞，以俟陛下感悟，然後尽其啓沃耳。陛下何不以朝聽之余，時御便殿，召當時賢相與舊德老臣，訪持變扶危之謀，求定傾救亂之術，塞陰邪之路，屏褻狎之臣，制侵凌迫脅之心，復門戶掃除之役。

(3)法宜畫一，官宜正名，今又分外官中官之員，立南司北司之局。或犯禁於南，則亡命於北。或正刑于外，則破律於中。法出多門，人無所措，實由兵農勢異，而中外法殊也。

(4)臣聞，古者因井田而制軍賦，閒農事以修武備，隄封約卒乘之數，命將在公卿之列，故兵農一致而文武同方，可以保乂邦家，式遏禍亂。暨太宗皇帝肇建邦典，亦置府兵，台省軍衛文武參掌，居閒歲則囊弓力穡，將有事則積耒荷戈。所以修復古制，不廢旧物。今則不然。夏官不知兵籍，止於奉朝請。六軍不主兵事，止於養勳階。軍容合中官之政，戎律附內臣之職。首一戴武弁，嫉文吏如仇讎。足一踏軍門，視農夫如草芥。謀不足以剪除兇逆，而詐足以抑揚威福。勇不足以鎮衛社稷，而暴足以侵軼里閭。羈縻藩臣，干凌宰輔。隳裂王度，汨亂朝經。張武夫之威，上以制君父。假天子之命，下以御英豪。有藏姦觀豐之心，無伏節死難之義。豈先王經文緯武之旨耶。

この対策を読んで、考策官であった左散騎常侍馮宿・太常少卿賈餗・庫部郎中龐嚴らはすっかり感じいったが、宦官の忌諱にふれることを慮かって合格者の中に劉蕡の名を入れることは見合わせた。この結果が発表されると、士人の間で不公平のそしりがおこったが朝廷のとりあげるところとはならなかった⁽⁴⁾。この結末を見ても要旨(2)に指摘された文宗の欠点がまざまざとその姿をあらわしていると私には思える。けれども、劉蕡の対策は文宗の執念を更に強いものにする効果はあったようである。

文宗にとって念願を実現するにはもう一つの難問があった。それは、後世、唐朝滅亡の遠因の一

つとして数えられる党争であった。何時の時代にも権力体制の中に生きようとする者に派閥の争いはつきものであるが、文宗治世の官僚のそれは特異な様相を呈していた。そこには、科挙に於ける「座主」と「門生」、あるいは、律令官制外の存在としての使職に於ける「使相」と「故吏」の関係で結ばれた人脈が見てとれる。個人的関係が官界中枢に入り込むための条件となっているのである。このような状況下では、門閥出身者であれ、科挙出身者であれ、そのみでは官界での立身はむずかしい。実力者との間に「門生」或は「故吏」の関係を成立させねばならない。このような関係で結びついた者達の間派閥争いが党争である。そうした関係は複雑な様相を呈するので、一刀両断的な色づけはあまり意味が無いことだと私は考えている⁽⁶⁾。

党争が最も尖鋭な形で展開されたのが、所謂「牛李の党争」であり、文宗治世はその渦中にあった。党争に憂身をやつす官僚連特に領袖達にとって、皇帝の存在はことさら問題にならない。皇帝は自己派閥の政界に於ける優越を示すものであればことは足りるわけで、皇帝個人の性格・識見などは問うところではなかった。党争を有効に利用しようとしたのは宦官であった。掌握した禁軍を背景に皇帝の擁立すら自分達の意向で行なうことができる宦官によって築かれた権力体制下を生きぬくには、派閥領袖は宦官実力者と結合せねばならないことというまでもない。宦官と結節点をもつ派閥官僚と宦官勢力抑制の相談をするなどは夢物語に等しいと文宗は感じた。文宗の考えは先ず派閥に属さず、宦官ともきれた存在にある「孤寒」と称される人物を相談相手とすることに行きついた。派閥領袖は偏向の非難を避けるため、体制の中に「孤寒」の何人かを必ず配置しておくものであった。そしてそれは「宋申錫事件」といわれる宦官実力者暗殺未遂事件を惹起したにとどまった。一の節で見た連行された王璠と王涯とのやりとりは、この事件についてのものである。

宋申錫。字は慶臣。何処の出身か不明。幼くして孤貧の境遇におかれながらも勉学して進士に及第。節度使の幕僚をつとめたが、慶長初年に中央政府に登用され、敬宗の宝曆2年、翰林侍講学士に充てられた。慎重で潔白な生活態度とどのよう

な派閥にも関与しない信念を貫いてきていた。当時、党争の激しさが次第に強められていた時のこととて与論は「孤寒」でも登用されるという激勸の措置とらわさした⁽⁶⁾。この人物を文宗は見込んで相談相手とし、翰林学士に任じて彼の意見を徴したところ、迂遠のようでも手間ひまをかけてじっくり宦官の威権をとり去って行くことだとの答。宋申錫は慎重さをよしとされて大和4年7月、宰相に列せられた。

当時の宦官集団は、護軍中尉王守澄を首領として文宗擁立の功による勢威を張っていたが、集団の中には憲宗暗殺の下手人と目される陳弘志、敬宗暗殺に加担したのに今は口を拭って王守澄にとりいった者などがあつた。王守澄自身にも憲宗暗殺について一役買ったとの疑いがあつた⁽⁷⁾。文宗は先ずこうした者共を除くことに懸命であつた。しかし、事は慎重を要した。宋申錫は、宰相になるに当って士人には大いに期待されたが、政務上では同僚宰相とさして変りのない判断を示すにとどまった。宋申錫に期待する与論に警戒心を強めつつある宦官を安心させ、一方で官僚の中に同志を見出そうとする策であつたと思われる。

大和5年2月戊戌。王守澄から、宋申錫が漳王湊を新皇帝に迎えようと策謀をめぐらせている旨神策都虞侯豆盧著の訴えがあつたと奏上された。文宗はこれを真にうけてしまった。文宗の怒りを利用した王守澄は、即座に宋申錫を家族もろとも屠ることを主張したが、宦官馬存亮にはばまれ、宰相と合議することになった。召集された宰相の名簿に自己の名がないので罪が自分にかつたことを知つた宋申錫は、やがて王守澄の奏上の一件を知らされた。3月庚子、宋申錫を太子右庶子に貶す旨が発令された。この時、宰相大臣誰一人として宋申錫の無実をいう者がなかつた。事件の加担者と目された人々の偽りの供述書が作成され宋申錫の謀反事件は真実にあつたことと判決された⁽⁸⁾。翌々壬寅の日、事件の処置について文宗から宰相大臣すべてに直接の下問があり、正午近く左常侍崔玄亮から本件を御史台にうつして再審理すべしとの意見が提出された。すでに事件の實在は立証されたとする文宗に抗して譲らない。王守澄の黒幕的存在であつた鄭注が再審となれば事件の虚構性があるみに出ると王守澄に今回の処分は

貶黜にとどむべしとすすめた結果、文宗も王守澄の言に納得して、同月癸卯、漳王湊を巢県公に、宋申錫を開州司馬に貶すとの処分がきまった。

この事件は、文宗の刷新政治実行者としての不適格性を示すとともに、宦官と陰で結びついた派閥領袖の日和見的态度をまざまざと見せつけている。

刷新政治の相談相手として十分信頼していた筈の宋申錫に謀反ありと一途に思いつめたのは何故か。王守澄が文宗の忌処を巧みについたからだといえると思う。文宗に事故があれば、これに替るのは順序からいって文宗の弟漳王湊であるから宋申錫が早々とこれと結ぶ準備をしたということが文宗に平静を失わせたといえよう⁽⁹⁾。たとい、宦官の力によるとはいえ皇帝の座に即き得た文宗としては面白くなかったにちがいない。しかし、宦官集団の権勢を一掃して皇帝の座を安定したものにしようとする工作の共同推進者宋申錫は自身が見込んでとりたてた人物である。その人物に対する信頼を当面の敵である筈の宦官集団の領袖の一語で忘れさせてしまうとは、見せかけのものにせよ権力維持については異常な執念があり他のすべてに優先するという人間一般の弱みがあらわれたといえればそれまでであるとしても体制改革者としてはあまりにもふさわしくないことを示したといえよう。

一方、この事件に於ける宰相の言動であるが、事件当時の宰相には、宋申錫の他に路随・牛僧儒・李宗閔等の名が見える⁽¹⁰⁾。先にも述べたとおり、彼等は事件については沈黙したままであった。ところが、崔玄亮が強硬に御史台再審を主張したために、文宗がもう一度宰相と取扱を協議する段階になって、牛僧儒がはじめて発言して消極的ながら宋申錫の冤罪をほのめかしている。

「人臣の到達し得る最高位は宰相であります。現在、宋申錫は宰相であります。たとい、今度のような策謀があったとしても、それによって彼が宰相以外に求め得るものがあるでありましょうか。彼が今度のような策謀に参画したとは思えないと存じます。」⁽¹¹⁾

文宗が、事件の性格と王守澄の態度に疑問を感じ出したことを見てとっての巧妙な態度の変更である。もし事件の虚構性が再審で暴露した時、虚

構の事件に無理な判決を下すことに同意した者とされ政権から遠ざけられ、替って政敵李徳裕とその一派が政権をにぎることへの警戒から先を見越しての発言であったと私は考える。

この虚構事件の創出に一役買った官僚に王璠がいる。彼は王守澄一派の排除計画が進行しつつあることその黒幕鄭注の逮捕の役を自分が負っていることを王守澄にもらしたのである。彼は穆宗治世の辣腕宰相李逢吉のひきで政界に地歩を固め、とかくの噂のあった人物であるが、河南尹であった時、宦官の威勢をかさに市中をあらしまわる宦官お抱えの悪少年共を容謝なく取締ったことで一部には評価されていた。その人柄はともかく手腕を買われて、大和4年7月宋申錫が宰相に就任した同じ月に吏部侍郎から京兆尹に転じた。当時、長安市中にも横行した悪少年取締りのためであったと思われる。またそれ相応の実績もあがり手腕の評価は高まった。大和4年12月、王璠は尚書左丞判大常卿事に遷ることになった。文宗・宋申錫のグループの一員としてである。宋申錫の計画がもれたのはこの頃のことと思われる⁽¹²⁾。河南尹・京兆尹として、いかに宦官の息がかかっているとはいえたかだか市中の愚連隊を相手にしていたのと、計画の仕上の一員として朝廷によび戻されて誅滅の目標である大物と対するのではあまりにも事情がちがすぎた。そのようなことに王璠はおそれを感じると同時に、事が失敗した時の我身の上を考えて裏切にふみきったのではなからうか。このことによって王守澄一派のまき返しが謀反事件の虚構を創出したのである。

4

宋申錫と結んでの文宗の計画はもろくも壊れえさった。しかし、文宗の執念はもう一度燃上った。その結果が「甘露の変」である。その間5年であるが、5年間の推移を見よう。

自分を擁立してくれた宦官の領袖といえども、祖父憲宗暗殺に一役買ったと思われているうえ、彼の配下には直接の下手人といわれる人物が放置されている。更に世間の文宗への期待と「宋申錫事件」の裏話などについて生じた失望の声なども耳に入ってくるので、名誉挽回のためにも事を成

功させねばならぬとの思いがあった。そこへ、情報が入った。文宗擁立以来、一枚岩と思われた宦官集団に亀裂が生じているというのである。文宗擁立に影の功劳ありと自負する宦官仇士良が、酬われるところ少なしと不満気であるという。この亀裂を利用する計画がたてられ、慎重に運ばれたかに見える。計画推進の中心となったのは、鄭注・李訓の二人であった。

鄭注。絳州翼城県出身の微賤で、代々「方技」を身すぎ世すぎの糧としていた。彼も医薬の術を駆使して、若い頃は長安在住の有力者の間を渡り歩いた。本来の姓は魚である。勝手に鄭姓に換えたが都合次第で魚姓をも称した。元和末年、襄陽節度使李愬に薬術の腕と李愬の意向にそむかぬ意見具申をしたことを評価されて重用され、李愬の徐州転任にも従った。このことが彼の以後における躍進を約束することになった。徐州監軍王守澄との結合が生じたからである⁽¹⁾。後、王守澄が枢密使として中央に帰ると穆宗に推薦した。病身の穆宗・暗愚な敬宗を戴いて王守澄が専権を振うについて相談にあずかり、文宗治世に入ると王守澄一派の黒幕としてねらわれたが、宋申錫事件についての記述のような次第ですりぬけた。以来、鄭注は王璠を恩人として遇するようになった。

李訓。始め仲言を名としたが、文宗のブレーンとなるに当って改めた。李逢吉の従子というから隴西李氏の一族である。進士出身者。鄭注とはちがって、生れも教養もなかなかのものである。従父李逢吉に重宝がられたが、宝曆元年、前石州刺史武昭の李逢吉暗殺未遂事件に際して一部のデッチあげに動いた罪に問われ象州に流された⁽²⁾。文宗即位の赦によってゆるされ洛陽に還った。当時の昭義軍節度副使鄭注に接近し王守澄に紹介された。王守澄は、鄭注の薬術と李訓の経学の才能を文宗に強く推薦した。李訓も他人の言動からその心中を察するに敏な男で、間もなく、文宗の宦官誅滅への執念を察し、いつの間にか鄭注をも同調させてしまった。

鄭注・李訓共に宦官集団内部の事情に通じていたこと、また、共に王守澄の一派と目されていたので、この間に宦官誅滅の策謀がすすめられていようなどとは誰もが疑う筈がないことが文宗をして執念達成のための協力者として彼ら二人を選

ばせたものといえよう。

大和8年8月、母の喪があけた李訓は、四門助教に任ぜられ正式に官僚の列に加えられた。文宗としては諫官に任用し翰林学士院に入れるつもりであったが李徳裕の反対にあって四門助教にとどめたのであった⁽³⁾。このことで李徳裕は李訓の恨みを買うことになった。李訓・鄭注は李徳裕の追放を謀り、当時、山南西道節度使として朝廷をおわっていた政敵李宗閔を興元から迎えて宰相とすることを勧めた。党争に手をやいていた文宗の意中を察し、両派を争わせることで騒ぎを大きくし、やがては両派を朝廷から追放して自分たちの地歩を固めようという第一着手である。同年10月、李宗閔が宰相に復帰すると李訓も周易博士翰林侍講学士となった。易の講義にかこつけて宦官誅滅の計画をすすめようというわけである。翌9年7月、李訓は兵部郎中知制誥翰林侍講学士となり、8月、鄭注も工部尚書翰林侍講学士となった。計画は仕上げの段階に入ったわけである。この年、朝廷では人事異動の嵐がふきあれた。6月、宰相李宗閔が明州刺史に左遷されると、李宗閔の一派はいうまでもなく李徳裕と何らかのつながりがあると目された者も続々と朝廷を逐われた。中には、李訓・鄭注に敬意を表さぬことで李宗閔又は李徳裕派とされた者もあった⁽⁴⁾。このため官僚の間に動揺が見えたので、9月癸卯朔日には両党の門生故吏でも8月末日以降罪を問わぬ旨の詔書を公布して事態を収息せねばならぬほどであった⁽⁵⁾。けれども党争の両巨頭を朝廷から放逐した李訓・鄭注の威信は天下に鳴りひびいたこというまでもない。朝廷の中樞はかくして第三勢力の手に帰し党争は短い期間ではあるが休戦状態におかれた。そして9月己巳、李訓自身禮部侍郎同中書門下平章事となり宰相に列した。同列の宰相も孤寒と称される人々であったが事はすべて李訓の決定によった。

一方、宦官集団を分断する計画も着々と推められていった。大和9年5月、仇士良を左神策護軍中尉に任じて王守澄と対抗させ、王守澄とそりが合わぬ左神策護軍中尉韋元素・枢密使楊承和・王踐言を地方節度使の監軍として転出させ対立をあおった。7月には、楊承和は曾つて宋申錫を庇護した罪、韋玄素・王踐言は李宗閔・李徳裕と結ん

で収賄した罪に問われて殺された。王守澄の専権の印象を強くし、宦官の中に反王守澄の気運を造成する目的であったと思われる。効果は充分にあらわれた。9月戊辰、右神策護軍中尉行右衛上將軍知内侍省事王守澄は左右神策觀軍容使とされ十二衛統軍を兼ねることになった。表面では一段高い地位に置かれたようであるが実権の伴なわない地位に逐いやられたのである。宦官の中に反対を唱える者はなかった。ついで10月辛巳、王守澄は毒酒を賜わって殺され揚州大都監を追贈された。人々は王守澄が佞人を近づけたために殺されたことに快嘆したが、李訓らの陰険さを疾んだ。宦官誅滅計画の第二段が始まる。李訓・鄭注の手中に兵力はない。禁軍は仇士良の手中にあったからである。両人は相談して節度使の牙軍を使うことにし、同年9月、鄭注が鳳翔節度使に転出し、内と外から協力して計画を達成させることにした⁽⁶⁾。11月戊辰、王守澄の葬儀が滄水のほとりで行なわれるに際して宦官を集めて一網打尽にする計画が樹てられ、兵力確保のために郭行餘・王璠が邠寧・河東節度使に転出した。ところが、このまま事がすすめられると功績は鄭注一人の手に帰すと思い焦った李訓が計画を変更して六日早く事を実行に移したことが、文宗の宦官誅滅計画を再び失敗に帰せしめたのである⁽⁷⁾。計画推行者側も一枚岩でなかったことが災いしたのである。

結 言

文宗の宦官誅滅計画はもろくも失敗に帰した。

「甘露の変」にあたって、事は大逆事件として処理され、首謀者文宗は安泰であった。このことは、皇帝が首謀者であることは明白であっても、宦官にも一旦自己が擁立した皇帝には手出しができなかったことを物語っている。若し廃位を実行すれば、反対派に口実を与えて自己を主流の地位から退かせることを意味する。側近として主流派となるには、自己が擁立した皇帝が欠かせない存在としてあったのである。

「甘露の変」によって朝廷は完全に宦官に制圧され、皇帝及び宰臣は宦官のいうがままになった。この辺の状況を「通鑑」245大和9年11月己巳の条は次の如く記している。

天下事皆決於北司，宰相行文書而已。宦官氣益盛，迫脇天子，下視宰相，陵暴朝士，如草芥。

「甘露の変」以後、宦官は、皇帝には政治に関心をもたせぬように仕向けた。道教信仰の道に導き、不老長生への憧れをあおり、丹薬服用によって自から命を縮めさせるようなこともした。死した皇帝の後継者は宦官の方寸に出た。後、昭宗の治世に君臨した楊復恭が処刑されるに当って残した言葉が「旧唐書」184宦官列伝、楊復恭の伝に見えるのが、宦官一同の自負のほどを物語っている。

門生天子既得尊位，乃廢定策国老。

また、陳寅恪氏が「唐代政治史述論稿」中篇に詳しくのべられたように、「甘露の変」の後にも朝廷の官僚が宦官集団内部の亀裂を利用して宦官誅滅を企てたことがあったことから宣宗治世の頃には却って「同族意識」を強め、団結して外に当るようになった。そして宦官集団の権威を支えるものとして皇帝、禁軍の他に藩鎮が加わることが決定的となった。貞元以後、藩鎮の統率者節度使に禁軍の部将が選ばれることが行なわれていたが宣宗の頃にその傾向は更に強いものとなった。節度使になるについては護軍中尉の推薦がいる。推薦をとりつけるためには運動費が必要であるが彼らの多くはその余裕がないので10割の利息をつけてでも富豪から借財して運動費を捻出した。節度使に任命されると借財の返済、お目付役である監軍の歓心を買うためのつけとどけ等で管下を収奪することが強くなった。更に中央の実力者にもたえずつけとどけが必要である。こうした節度使がにぎる藩鎮は宦官集団にとって有力な財源となったのである。しかし、このような藩鎮は次第に中央からの節度使を歓迎しない空気をかもし、藩鎮が反中央的姿勢をとる端緒をひらき、やがては藩鎮が宦官から離れてしまうことになった。

以上要するに、唐王朝の皇帝は、絶えず皇帝権の強化を志向し貴族層を制肘しようとしてきた。科挙、律令官制外の官職の設置などがその志向の反映であった。しかし、貴族層は巧みに妥協しつつ新しい体制の中に生きつづけ要職を独占した。そこに要職をめぐる派閥抗争が生じた。これと並行して形成された側近集団に宦官集団があっ

た。この集団も初期には皇帝との私的結びつきによって皇帝権を強化し、貴族層制肘に利用される筈であったが禁軍を握るに至って皇帝権すら制肘する存在となった。一面「孤寒」を重用することで党争を終息させ、一面で宦官集団から皇帝権を独立強化させようとの方寸に出た事件が「甘露の変」であった。しかし、事はならず、逆に宦官集団の結合を更に強いものにし、官僚世界では、しばらく党争は続くが、領袖亡き後では、進出してきた門閥出身にしてかつ進士合格者を意味する清流と称する貴族官僚集団が形成され新しい型の貴族政治を生み落す結果になった。

「甘露の変」がもたらしたものは、皇帝権が強化されるどころか、却って、宦官集団の権勢の象徴にすぎぬものとしての性格を強くし、一方、貴族政治の最後の存在となった清流貴族集団の飾り物にすぎぬ存在に転落したということであったといえよう。

補 注 序 言

(1) 『通典』40の巻末に於いて、睿宗景雲2年の監察御史瑋琬の上疏を援用して杜佑が官職の無意味な重複を指摘している。

(2) 『全唐文』『金石萃編』などに朝臣の手になる宦官実力者の墓誌・神道碑銘が収められていてその結合のほどを示している。

1

(1) 以下、変の状況については『通鑑』245 大和9年11月壬戌の条によって敘述した。

(2) 『通鑑』245 大和9年11月壬戌の条の胡注に、「唐制、凡朝、皇帝既升御座、金吾將軍奏左右廂内外平安。」とある。

(3) 原文には「出閣門」とあるが、『通鑑』241 元和15年10月壬午の胡注に引く欧陽脩の解によって紫宸門の小門と訳しておく。

(4) 王涯の言は、これより先、大和5年におこった宦官王守澄誅滅未遂事件をさす。後述。

2

(1) 桑原隲藏「支那の宦官」(桑原隲藏全集第1巻『東洋史説苑』所収)

(2) その代表的な例はすでに後漢末期に於ける「党錮

の禁」に見える。

(3) 『旧唐書』184 宦官伝序、貞觀中、太宗定制、内侍省不置三品官、内侍是長官、階四品。

(4) 『大唐六典』2尚書吏部に清望官に注して謂内外三品己上官、及中書黃門侍郎、尚書左右丞、諸司侍郎云々とある。

(5) 『新唐書』47百官志による。『大唐六典』12内侍、『旧唐書』44職官志にはこの機構の変化について触れるところがない。

(6) 拙稿「唐の官僚制と宦官」。

(7) 前掲拙稿。

3

(1) 後、文宗が亡くなる直前、文宗は皇太子成美を立てることを詔したが、文宗を深く恨んでいた仇士良・魚弘志が詔旨を矯めて文宗の弟潯王湊(後の武宗)を皇太弟に立て、皇太子成美は若年の故をもって陳王に格下げする旨のものにすりかえた。これに対して朝臣は異を唱えられなかった。武宗即位にあたって陳王成美・安王溶は死を賜わった。

(2) 『旧唐書』159韋處厚伝。

(3) 『旧唐書』190下、文苑伝の劉蕡伝。又、『新唐書』178劉蕡伝。

(4) 『新唐書』178劉蕡伝に、合格者23名中河南府參軍事李邵が「蕡逐我留、吾顔其厚耶」といって自分に与えられる官を劉蕡に回授されるよう申出た上疏文をのせる。

(5) 前掲拙稿。

(6) 『旧唐書』167宋申錫伝。又、『新唐書』152宋申錫伝。

(7) 『旧唐書』184宦官伝中の王守澄伝。又『新唐書』208宦者列伝中の王守澄伝。

(8) 『旧唐書』167宋申錫伝。又『新唐書』152宋申錫伝。

(9) 『旧唐書』175懷懿太子湊伝に、湊が賢く人望があること、文宗が兎角病弱である上に皇太子は幼少であることを利用して鄭注が筋書を作ったとある。

(10) 『新唐書』63宰相表下。

(11) 『通鑑』244 大和5年3月庚子の条。

(12) 『通鑑』244 大和5年2月の条に王璠が謀事をもちたことを記述し、その考異に京兆尹は前年12月に交替している点を指摘している。『旧唐書』169王璠伝及び『新唐書』179王璠伝を参照し、又『通鑑』が続けて、「鄭注・王守澄知之、陰為之備。」と記述

している点から考えると謀事がもれて失敗に帰すまでの間2月ばかりの日時の経過があったと思われるのでこのように推論した。

4

- (1) 『旧唐書』179鄭注伝。又、『新唐書』169鄭注伝。
- (2) 『通鑑』243 宝曆元年9月に、
武昭は石州刺史を罷免されたことについて李逢吉を怨んでいた。たまたま李逢吉とそりの合わない李程の一族水部郎中李仍叔が武昭の怨みに火をつけようと、李程が武昭に官を与えようとしたが李逢吉にはばまれたのだと云った。真にうけた武昭が酒の勢にまかせて左金吾兵曹茅彙に李逢吉を刺殺してやると息まいた。これを聞いて訴えた者があり、三司に鞫問を命じた。この時、李仲言(訓)が茅彙に李程が武昭と共謀したと疑証するようすすめたが茅彙にけられ、李仲言が罪に問われたことを記す。
- (3) 『通鑑』245 大和8年8月辛卯の条。
- (4) 『通鑑』245 大和9年8月の条に、
鄭注之入翰林也，中書舍人高元裕草制言，以医薬奉君親。注銜之奏，元裕嘗出郊，送李宗閔。壬寅，貶元裕闕州刺史。…時注与李訓所惡朝士，皆指目為二李之党，貶逐無虛日。
とある。
- (5) 『通鑑』245 大和9年9月癸卯朔の条。又、『唐

大詔令集』110大和9年9月癸卯朔「告諭宗閔德裕親故更不問罪勅」

- (6) 『旧唐書』169李訓伝並に鄭注伝。又、『新唐書』179李訓伝並に鄭注伝。
- (7) 同前。又『通鑑』245大和9年9月丁卯の条に、
(鄭)注為鳳翔節度使。李訓雖因注得進，及勢位俱盛，心頗忌注。謀欲中外協勢，以誅宦官，故出注於鳳翔。其實俟誅宦官，并凶注也。
とあり、同年11月丙午の条に、
約既定。(李)訓与其党謀，如此事成，則(鄭)注專有其功。不若使(郭)行餘・(王)璠，以赴鎮為名，多募壯士，為部曲，并用金吾台府吏卒，先期誅宦者，已而并注去之。
とあって、李訓が鄭注を煙たい存在として意識していたことを述べている。なお、期日を早めて計画を実行に移すことについて相談した者は、李訓と親しい郭行餘、王璠・羅立言・韓約・李孝本と舒元興のみで、他の宰相は何の相談にもあずからなかった。さてこそ、一で敘述した事件当日の中書政事堂に於ける王涯らの繰言も出たわけである。又、この事件が李訓が鄭注をかついでの大逆事件として処理されたのは、「甘露の変」の実行に参画しなくても鄭注は王守澄葬儀の日に於ける宦官誅滅計画の推進者であったことを仇士良らに利用されたのである。